



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 67 号 2015 年 8 月 4 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<第 23 回大会委員長挨拶>

大野 久：日本青年心理学会第 23 回大会開催について

<特集：私の意識を変えた忘れられない青年>

山添 正：教え子たちと人生のマラソンを走り続ける

高村和代：私の職業選択を導いてくれた友人たち

橋本和幸：援助は一律ではないことを教えてくれた青年たち

松嶋秀明：A 君との再会

赤木真弓：「全く信頼されてない」と言われて気づいたこと

亀田 研：青年 K とその友人 O とうなぎの話

<書評>

伊藤裕子：スーザン・D・ハロウェイ（著） 高橋 登・清水民子・瓜生淑子（訳）
『少子化時代の「良妻賢母」：変容する現代日本の女性と家族』

<広報>

国際交流委員会からのお知らせ
事務局からのお知らせ

<第 23 回大会委員長挨拶>

日本青年心理学会第 23 回大会開催について

大会委員長 大野 久（立教大学現代心理学部）

このたび日本青年心理学会第 23 回大会を立教大学で開催させていただくことになりました。

近年、団塊の世代の先生方の退会が多く、会員数の減少という課題に直面し、新しい学会の形を意識しながら、わが国の青年心理学の歴史を振り返りつつ、これからの青年心理学研究のあり方について、何らかの新たな指針が得られるような大会にできればと考えております。

また、準備委員会も若いメンバーを中心に構成しました。少人数による手作りの大会ですが、参加される皆様にとって世代を超えた有意義な交流の場となりますことを心より願っております。

大変お忙しい時期かとは思いますが、多くの皆様のご参会をお待ちしております。どうぞ宜しくお願いいたします。

＜特集＞ 私の意識を変えた忘れられない青年

日々の生活の中で訪れるさまざまなライフイベントは、人の意識を大きく変容させるきっかけになりうるものです。中でも「他者との交流」によって、自分の意識が大きく変容したという人も少なくないのではないのでしょうか。そこで本特集では、会員の方々の意識を変えた「他者」の中でもとくに忘れられない「青年」を取り上げていただき、実際にあった交流についてご寄稿いただきました。これらの事例から、「これまで」そして「これから」の青年との交流について、会員の皆様のご一考の機会となれば幸いです。ご執筆いただいた会員の方々、貴重な経験を共有いただきありがとうございますございました。（担当：杉本英晴・則定百合子）

教え子たちと人生のマラソンを走り続ける

山添 正（神戸親和女子大学発達教育学部）

「出会った影響力のあった青年」と聞かれて、私がまず思い出したのは、1979年に山梨大学に32歳で赴任した年の8人（一人は逝去）の教え子たちです。今も交流が続いています。私はこのグループに「青雲会（今は50代後半ですが）」と名付けましたが、なぜこの7人の男子卒業生たちを取り上げたのか、なぜ交流が続いているのか、理由を述べましょう。それは、出会ってから10年後、私がユング研究所での夢分析がその意味の一端を解説してくれました。例えば教え子Aの場合について述べましょう。

夢：私は、私の教え子Aと地方のマラソン大会に出場した夢をみました。

Aは、親戚の神主の家に養子（里子）に出され、その義父が1980年代にすでに「認知症」で彼は、大学で学びながら、義父の介護をしていました。

「里子」についての私の連想と意味は、両親を16歳で亡くした私の母親の育ち方に関わる事です。私自身が「里子」のテーマを生きている事をその時知りました。私の臨床家としてのイニシアルケースは、「父親不在児」です。そして、私の最初の論文は「父親不在児の発達心理学的考察」です。これは母親が、16歳まであの阪神淡路の震源地である野島・富島の網元で、2番目の娘として裕福に育てられましたが、玄界灘に漁に出かけた父親が台風に遭遇して、船が沈没し父親が40歳で亡くなりました。後を追うように母親を失い、家庭が崩壊し、その後、実の両親を亡くした子として育つことになった母の姉妹（一人男兄弟がいましたが夭逝、残された7人は姉妹）は、母親も含め全員「里子」に出されました。

いろんな家庭に「里子」に出された姉妹は、親の法事、お正月とことあるごとに集まり喧嘩はしますが、仲のいい姉妹として交流していました。そのにぎやかな、かわりの経験が「青雲会」というグループとの交流の基礎にある事を、「教え子Aと地方のマラソンを走る」という此の夢に教えられました。私は彼らと「人生のマラソン」をなお一緒に走っていますが、家族を超えた母親の育ち方・生き方を私も「青雲会」を通して生かしてもらっているのかもしれません。

私の職業選択を導いてくれた友人たち

高村和代（岐阜聖徳学園大学教育学部）

大学時代の私は、アイデンティティが拡散していた。将来の職業も決められずどうしてよいかわからないまま、現実逃避をしてダラダラと享樂的な学生生活を過ごしていた。大学3年生になると、友人との話題は将来についてのことになることが多かった。しかし私はどのような職業に就きたいのか全くわからず、ただ漠然と「丸の内を闊歩するキャリアウーマン」という答えしか浮かばなかった。周りの友人たちは、一般企業に進む者、公務員になる者、大学院へ進学する者、様々だったが、みんなそれなりに自分の進路を決めて、それに向けて動いていた。私は自分の将来の見通しが全く見えず、焦るばかりだった。

結局卒業後の進路を決めることができないまま、大学を卒業してしまった。友人たちは社会人となり、社会的責任を担う立場となり、経済的自立も果たし、ものすごく「おとな」に感じた。対して自分は、ずるずると自分のことを決められないまま、悶々とした日々を過ごしており、友人たちとの差に劣等感やら罪悪感やらを感じていた。当時の私は、結構病んでいたのではないかと思う。よく「神になりたい」とこぼして、友人たちを困らせていた。なぜ「神になった」かったのかというと、神ならば進む道の正解を知っているだろうと考えていたからである。

「神になった」かった1年を過ごし、最終的に大学院への進学が決まり、現在に至っている。私が大学院で「職業選択時のアイデンティティ形成」をテーマに決めたのは、このような経緯があったからである。周囲の友人たちが「なぜそんなに簡単に将来の志望が決められるのか？」私には不思議でならなかった。彼らももしかしたら表面には出さないところで悩んだりしていたのかもしれないが、私の目には、私のようにもがき苦しむことなく、とてもスムーズに将来を決定しているように映り、とても羨ましかった。しかし自分のもがき苦しんだ経験は決して無駄ではない。だからこそ自分がもがき苦しんだ経験にも必ず意味があるということを何とか証明してみたいという思いが、私の研究テーマにつながっていったのである。

今こうして大学で働いていられるのは、大学時代の友人たちがいてくれたからこそである。最近はなかなか会うこともなくなってしまうが、今度友人たちと会う時は、友人たちに感謝と自分のこれまでの成果を伝えられるようにしたいと改めて思う。そのために、これまでの自分に甘い生活を悔い改めることをここに誓いたい。

援助は一律ではないことを教えてくれた青年たち

橋本和幸（了徳寺大学教養部）

心理的な援助には、傾聴を中心に来談者のペースに合わせる印象が持たれるが、必要ならば問題への直面化も行う。今回は、教育領域の心理職として働き始めた年に行った、中学生を対象とする2事例から、直面化までに時間がかかった場合とすぐに行えた場合を紹介したい。

事例1：男子。理由ははっきりしなかったが、中1の初めに不登校になり、基本的に自宅から出なくなった。私は、中2の初めから家庭訪問を始めた。彼は会うことは拒否せず、例えば、ゲームしながら話をすることはできた。しかし、学校や勉強の話題はかわされてしまい、次の約束をキャンセルされた時もあった。会って時間を共有できてい

でも、本当にこれで彼のためになっているのか。迷いながら週 1 回約束をして会うことを続けた。制度上、彼がどういう状態であれ、中学校卒業とともに家庭訪問は終了になる決まりだった。このため、中 3 の 1 月に、こちらも腹をくくって、彼に将来についてどう考えているか尋ねた。すると、父親と同じ仕事をやってみたい、そのためには高校に行かなければならないと思っていると語った。直後に、担任に高校進学 of 意志を表明し、受験をした。

事例 2：女子。友人関係のもつれから、教室に行けなくなった。スクールカウンセラーである私との相談にだけは登校できていた。この生徒は、同級生、担任、両親への不満ばかりを言っていた。そこで、「自分の気持ちをわかってもらえなくて、さみしいんだね」と直面化をはかった。すると、担任と向き合って話すようになり、そのうちに、教室に戻ることができた。そして、卒業時には、不登校で苦しい時期を支えてくれた両親に感謝する、と文集につづった。

この 2 事例は、仕事を始めた年に、わからないことも多い中で、青年と学校との接点を切ってはいけなと、迷いながらも必死に行ったものである。改めて振り返ってみると、それぞれの青年が持つエネルギーや決心する時機を見極めることが、どれだけ大切であるかを教えてもらえたと思っている。

A 君との再会

松嶋秀明（滋賀県立大学人間文化学部）

私が中学校 2 年生だった頃の話しよう。隣町のショッピングセンターにいた私の背後に少年の気配。どうやら隣町の、いわゆる「ヤンキー」中学生だ。友人から「カツアゲされた」「殴られた」と怖い話をたくさん聞いていた私は、今まさに自分がその当事者になろうとしていることに気づいて、心臓がバクバクした。少年が私に話しかけてくる。「あの一、松嶋っていう人ですか？」・・・あれっ？、想像していたのと違う・・・。なんか間の抜けた感じだ・・・。戸惑いつつうなづく私に、少年たちは「A さんを知ってますか？」と続ける。もちろん！。彼は小学校の同級生であり、面白く、みんなから一目置かれる少年であった。先生とぶつかった時、友達とケンカした時は怖かったが、普段はとてもやさしかった。運動が得意でない私のマラソン大会の様子を、わざわざ放課後「がんばってたな」と言いに来てくれたのも A 君だ。A 君は 6 年生の時に引っ越しして隣町にいき、中学ではいわゆる「ヤンキー」になったと風の便りにきいていた。少年たちは「A さんがしゃべりたいとおっしゃってます」というと、私を店外に連れ出した。A 君がいた。噂に違わずイカツくなっていたが A 君だ。お互いに「久しぶりやなあ」と声をかけあい、少しだけ話をしてわかれた。何の話をしたのか覚えていない。ただ、転校しても自分のことを覚えていて、街で見つけて話そうとしてくれたのが嬉しかったし、私に話しかける勇気がなくて取り巻きに確かめさせるシャイなところが、なんだか A 君らしいと思った。研究者として、いわゆる非行少年を決して特別な存在ではなく、自分たちとどこかでつながった、身近な存在として感じる私をつくったのは、彼のような存在だ。いくぶん美しく書き換えられているかもしれないが、A 君は私にとって忘れられない存在だ（実体験に基づきつつ、細部を改変し、複数の人物をつなぎあわせていることをお断りします）。

「全く信頼されてない」と言われて気づいたこと

赤木真弓（立教大学大学院現代心理学研究科）

社会経験だけは長いので、一般企業で課長職についていた 30 代の頃のことを書かせていただこうと思います。A さんは当時 20 代半ば、よい仕事をするのですが、自分の担当領域にのめり込みすぎていたため、担当業務を変更することにしました。A さんに伝えると、「納得できません」と食い下がってきました。そこで私は、時間をかけて質問に答え、彼女の課題や目指すべきことについて説明しました。我ながら丁寧なマネジメントだと密かに満足していたのですが…後日、A さんが「何を言っても論破されて、私は上司に全く信頼されてないみたい」と落ち込んでいた、という話を耳にしたのです。私は正しいことを言ったのだから、とやり過ぎしましたが、A さんに以前のような前向きさがなくなったことと、「信頼」という意味が気になっていました。しばらくして、A さんの以前の担当領域で問題が起き、A さんにとっては業務外でしたが「あなたにしか任せられないから」と頼んだところ（実際そうだったので）、素晴らしい働きで解決してくれたという出来事がありました。そして、その一連の流れの中で、私はようやく気づいたのです。彼女がひと肌脱いでくれたのは、仕事の好き嫌いではなく、自分が信頼されていると感じたからだ、ということに。振り返ると、私は彼女に対して「どうせ仕事の変更は嫌がるだろう」というスタンスだったし、「気持ちはわかるけど」と枕詞のように付けつつも、実際には常に説得モードでした。その結果、A さんに「信頼されていない」と感じさせてしまったのです。上司と部下の間に、ベースとなる「信頼」がなければ健全な成長を支援できないと、A さんを通して学んだことが、その後の私のマネジメント意識を変えてくれた気がします。

そして、生涯発達についての知見を多少得た今、改めて振り返ると、社会人人生におけるキャリア発達の体系的な理解には、下手なマネジメント論より漸成発達理論の応用が有効であると感じます。

青年 K とその友人 O とうなぎの話

亀田 研（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

私が知っている青年 K の話だが、彼が大学 2 年の夏、大学生活も中だるみの時期で、失恋、学業の行き詰まり、将来が見えないことへの焦り等で混乱していた時期があった。その時期に、人は何のために生きるのだろうと考えていた。彼は、悩みのさなかで、ぐるぐると考え続けることしかできなかった。彼は大学の友達数名にそれとはなく、何のために生きるのだろうとたずねた。「それを探すために生きる」という先送りにしている答えや、「学ぶため？成長するため」という優等生的な答えは、彼の胸に響かなかった。

なんだかじっくりこない中、友人 O にうなぎを食べに行こうと誘われ、大阪の石橋駅から、中ノ島のうなぎ屋まで歩いて行った。約 2 時間ぐらいかかった。友人 O は青年 K の同じ学部で名前が隣というきっかけで出会った友人で、同じ将棋部でもあった。歩きながら、とつとつとした会話をした。

O「K は、最近暗くない？」

K「まあ、考え事してる時が多いかなあ。」

K「うーん。そうだなあ。人ってさあ、何で生きているんだろうねえ、生きていることに意味があるのかなあ？なんか、何やってもむなしって感じで最近、何やっても中途半端だし。」

0「そうだねえ。(沈黙20秒) まあ、植物と一緒にじゃない?」「中途半端でもやれることは、あるし」

K「だね・・・」

「植物といっしょじゃない?」何か、なぜか心に響いた。意味がわからなくても、生きるための目的がなくても生きているという事実を突きつけられた気がしたからだ。生き物として、生きている。人は、世間のものさしや、その社会の常識を学んで、なぜ生きるのかをなんとなしに身に着けているが、その常識を疑ってみると、文化的に意味を被せられているだけで、その意味のベールを剥ぎ取ってみると、意味を考えるまえの事実レベルの生が見えてくる。青年Kはそれ以降、なぜ生きるのかということに悩むよりも、人はなぜ、なぜ生きるのかを問うのか、どのようにして、その意味を見つけ構築しようとしているのかを考え始めたという。

青年Kが中ノ島で食べたうなぎは、一度白焼きし、その後蒸してから、タレをつけて焼くうなぎで、身が柔らかくて美味しかった。帰りは電車で帰った。

本特集の具体的な事例は、個人が特定されないようご配慮いただきました。
ご寄稿いただいた会員の皆様、ありがとうございました。

<書評>

『少子化時代の「良妻賢母」：変容する現代日本の女性と家族』

スーザン・D・ハロウェイ著 高橋 登・清水民子・瓜生淑子訳 新曜社(2014 年刊)

伊藤裕子 (文京学院大学人間学部)

本書の書評が、青年心理学会のニューズレターで取り上げられる意味はどこにあるのだろう。発達心理学会なら了解できるが… しかし、アイデンティティを確立し、関係性を築きつつ、次なる課題である親密性を形成する、そのプロセスに引き伸ばされた青年期が重なるとすれば、その先にある「家族をもつ」「子育てをする」ことが青年の射程に組み込まれてくることは必然なのかもしれない。現在、未婚青年の「結婚の理由」の筆頭に「精神的な安らぎ」とともに「子どもや家族がもてる」が男女とも挙がって来るのだから。

しかし、日本の社会が「子どもや家族」を第一の価値に据えることを許さないのだろう。戦後の高度経済成長時代を性別役割分業で過ごしてきた男女にとって、男性が家庭に関わることを、女性が職業に携わることを、片手間仕事として認めたとしても、“本来の業務”とはみなさないからである。

「良妻賢母」とは明治時代につくられた規範で(小山, 1991), 新しい近代国家建設に役立つ女性像と考えられた。今日、このカビの生えたような言葉をそのまま持ち出す人は少ないが、しかし、女性の中にもそして男性にもしっかりと根付いているといえる。国際比較からみれば、日本の既婚女性は母親役割へのこだわりが強いが、家庭生活・結婚生活への満足度は低い。きめ細やかな育児を行っているが、育児に自信がなく不安感も高い(“育児不安”という概念すらある!)。これは日本の文化規範が求める母親役割の基準が高すぎることで主たる原因だと著者はいう。

著者は、夫の家事・育児分担を、手伝おうとしない「夫の性格」に帰すが、男性は他の男性との比較から自己の分担を評価するのに対して、女性は夫との関係からそれを評

価するなど「比較する基準の違い」が男女のすれ違い産む (Kluwer et al., 2002) など、視点の違いはあるが、日本の子育てと妻・母役割を相対化するためにも是非一読を勧めたい。

【引用文献】

小山静子 (1991). 良妻賢母という規範 勁草書房.

Kluwer, E. S., Heesink, J. A. M., & Van de Vliert, E. (2002). The division of labor across the transition to parenthood: A justice perspective. *Journal of Marriage and the Family*. 64, 930-943.

<広報>

国際交流委員会からのお知らせ

委員長 平石賢二

平成 27 年度より国際交流委員会が再編され、本格的な活動を開始致しました。日本青年心理学会における国際交流、研究の国際化推進に向けて、少しでもお役に立てればと考えております。

委員会のメンバーは、天谷祐子先生、茂垣まどか先生、池田幸恭先生（研究委員との兼任）、杉村和美先生（ICP2006 プログラム委員）、白井利明先生（担当理事、ICP2006 組織委員）、と私の 6 名です。

平成 27 年度の活動としては、第 23 回大会（立教大学主催）において国際交流委員会企画シンポジウム（自主シンポジウムとして）を開催したいと考えています。テーマや登壇者は現段階では未定ですが、国際交流に関する活発な議論ができれば幸いです。

平成 28 年度は、ICP2016(31st International Congress of Psychology, 日本心理学会第 80 回大会との共同開催、会期：平成 28 年 7 月 24 日～29 日、会場：パシフィコ横浜）が開催されます。日本青年心理学会からは、講演者(Invited Address)としてエリザベッタ・クロチェッティ先生 (Dr. Elisabetta Crocetti) を推薦しています。クロチェッティ先生は、オランダ・ユトレヒト大学(Utrecht University)の若き研究者で、近年大変精力的に多くの研究論文を発表されています。アイデンティティが専門ですが、青年期の親子関係などにもご関心があり、また統計解析にも造詣がおります。そのため、国際交流委員会としては、日本青年心理学会会員の皆様にこの ICP2016 へのご参加を積極的に呼びかけていきたいと考えています。発表申し込みは 12 月 1 日までのようです。また、ICP2016 のプレ企画として、クロチェッティ先生をお招きし、ワークショップを開催できればと現在計画中です。

学会員の皆様には、是非、様々なアイデアをお寄せ頂き、国際交流委員会の活動をサポートしていただきたいと思います。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

<委員からのメッセージ>

・若かりし頃、英語文献の著者について「今この世界で自分と同じように生きている人」となかなか思えませんでした。国際学会に参加し、そういった研究者を間近に見ることで、世界で展開されている研究を身近に感じることができるようになりました。特に若い研究者の皆様、今回の ICP や ICP プレ企画ワークショップを良いチャンスと捉え、「国際学会デビュー」してみませんか？(天谷祐子)

・「国際」と聞くと少し構えていました。しかし参加してみると、視野が広がるのはもち

ろんのこと、素晴らしい研究も発展途中の研究もある、ということが肌で感じられました。日本国内の研究発表と同様に、現在進行中の研究にも出会えます。さらに、語学力向上の動機づけも高まります。(茂垣まどか)

・研究委員会では、2015年からの長期的研究テーマを「青年を取り巻く時代・文化」と決定いたしました。海外ボランティアやインターネットを通じて、日常的に国際交流をしている青年たちと出会う中で、国際社会という視点の重要性を感じています。そして、日本の青年心理学研究を世界に「発信」していきたいという思いも抱いております。皆様と国際交流について模索し、取り組んでいくことができる場を大切にしたいと考えています。(池田幸恭)

・国際交流の意義は、日本の青年期発達をより深く理解できることや、自分自身の研究の位置づけを確認できることにあります。皆様と一緒に世界中の青年研究者とつながっていききたいと思います。(杉村和美)

・日本で開かれる国際学会は、初めての発表の良い機会です。もしabstractの書き方などに自信がないために尻込みしている人がいましたら、お力になりますので、遠慮なく言って下さい(ただし、私も自信はないです)。(白井利明)

事務局からのお知らせ

I. 会員ホームページのリンク

日本青年心理学会ホームページ(<http://www.gakkai.ac/jsyap/>)の「学会の紹介」タブの最後に、「会員のホームページ」の欄があります。掲載をご希望の方は、事務局(seinenshinri@gmail.com)までメールで連絡をください。

(記入例) 山田花子会員(〇〇大学)のホームページ
青年期・進路指導の紹介、論文紹介など

II. 会員異動

2015年8月4日現在で会員は399名(うち名誉会員が3名)となります。

III. 送付先不明の方のお名前

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内
TEL : 075-753-3047
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Homepage : <http://www.soc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00940-6-273417

口座名称：日本青年心理学会

お問合せはできるだけ **E-mail** をお願い致します。